

## 関西大学図書館蔵生田本『和漢朗詠集』上巻の本文

恵 阪 友 紀 子

### 一、はじめに

関西大学図書館蔵生田本『和漢朗詠集』（以下、生田本）は、鎌倉時代中期に書写されたとおぼしき伝本である。『和漢朗詠集』の写本は数多く現存するが、その多くは美麗な料紙に書写されるなど、調度品としての性格が強く、誤写や誤脱など本文に問題があるものも少なくない。このような状況で、生田本を紹介する意義は、裏書にある。該本は上下二巻からなる卷子本で、上巻の背面に詳細な注（裏書）が書かれている。

この裏書の内容は、平安後期の学者である大江匡房が注した、いわゆる「朗詠江注」と一致するものが多い。現在、朗詠江注を有する諸本は数種類が紹介されている。その中でもこの生田本は、大江匡房が所持していたと思われる「江本」の特徴とよく一致する。朗詠江注を有する正安本・建長本・貞和本・長親本では、夏部の一項目「扇」に「江本無扇題」と書き入れられるが、これは

江本に「扇」がなかったことを示している。生田本はまさにこの扇の項目を欠いている。この点からも、大江匡房の「朗詠江注」を考える上では欠くべからざる本文であるといえる。なお、生田本については、拙稿「関西大学図書館蔵生田文庫本『和漢朗詠集』と朗詠江注」（『中古文学』第八十六号、平成二十二年、中古文学会）に詳しく紹介した。

本稿では、生田本上巻の本文全文と裏書などの注を対照できる形で紹介する。

### 二、生田本の書誌

形態…卷子本二巻。一紙は縦三十一センチ。上巻三十六紙、下巻三十四紙を継ぐ。

奥書…なし

界線…行間及び天地に薄墨界線、地の界線は、上巻では一条、下巻では二条。

筆跡・上下は別筆。明治二十年に記された佐藤栄中の鑑定した折

紙には、上巻藤原為家、下巻世尊寺行能とする。ただし、

上巻巻頭目録「九日付菊」、下巻風402「錢別632前半、恋786

」白798前半の三箇所は江戸期の補写で、同じく佐藤栄中の

鑑定には、始めの二箇所を中院通村、最後を武者小路実陰

とする。なお、上巻夏部の「扇」全体を脱するが、背面に

同筆で補われている。

題 … 外題なし。内題は「和漢朗詠集卷上（倭漢朗詠集卷下）」、

尾題は「和漢朗詠集上（卷下）」。

書写形式…七言詩句一行、和歌二行書きとし、漢詩一行と和歌二

行が同じ幅で書写される。

その他…墨筆の訓点及び声点（圈点）、朱のヲコト点のほか、異文

書入や詳細な作者・詩題注記を有する。

上下巻は筆跡のみならず、界線などの書写形式が異なる。

本来一揃いとして書写されたものではないと思われる。

### 三、凡例

• 本文は、関西大学図書館蔵生田本和漢朗詠集上巻を翻字した。

• 本文の改行は、底本のままにした。

• 表記は現行の字体に統一した。

• 判読不能文字は■で示した。

• 詩句については、読みやすさを考慮して、句毎に一字分の空白

を空けた。

• 翻字に際しては、本文、詩題作者注記、書入注、裏書を対象とし、訓点の類は、翻字の都合上、省略した。

• 頭注や裏書は、該当詩歌の横に、《頭注》《裏書》として翻刻した。ただし、裏書のうち、漢字の訓を示したもので、どの詩歌のものか特定できないものについては、一部を省略した。

• 割書は（ ）で示した。また、割書内の改行は、／で示した。

• 脱字などで行間に補われている場合には、〔 〕で示した。

• 詩歌の番号は、『新編国家大観』（底本は御物伝藤原行成筆粘葉本）の番号である。

### 四、生田本翻刻

和漢朗詠集卷上

春

立春 早春 春興 春夜

子日（付若菜） 三月三日（付桃） 暮春 三月尽

閏三月 鶯 霞 雨

梅（付紅梅） 柳 花（付落花） 躑躅

款冬 藤

夏

更衣 首夏 夏夜 端午

納涼 晚夏 花橘 蓮

郭公 螢 蟬 扇

秋

立秋 早秋 七夕 秋興

秋晚 八月十五夜〈付月〉 九日〈付菊〉

九月九日〈付菊〉 九月尽

女郎花 萩 蘭 槿

前栽 紅葉〈付落葉〉 雁〈付帰雁〉

虫 鹿 露 霧

搗衣

冬

初冬 冬夜 歳暮 炉火

霜 雪 水〈付春水〉

霰 仏名

春

立春

001 逐吹潜開不待芳菲之候 迎春乍

変将希雨露之恩〈立春日内園進花賦〉

《裏書》公乗億イ

002 池凍東頭風度解 窓梅北面雪对寒〈篤茂〉

《裏書》春又之美也

003 としのうちに春はきにけりひと、せを

こそとやいはむことしとやいはむ〈在原元方／已上旧年〉

004 柳無気力条先動 池有波文氷尽開〈白〉

005 今日不知誰計会 春風春水一時来〈白〉

006 夜向残更寒磬尽 春生香火曉炉燃〈山寺立／春／良春道〉

007 そてひちてむすひしみつのこほれるを

はるたつけふの風やとくらむ〈貫之〉

008 はるたつといふはかりにやみよしの、

山もかすみてけさはみゆらむ〈忠峯〉

《裏書》平貞文家歌合

早春

009 氷消田地蘆錐短 春入枝条柳眼低〈元〉

《裏書》寄楽天

010 先遣和風報消息 続教啼鳥説来由〈白〉

011 東岸西岸之柳 遅速不同 南枝北

枝之梅 開落已異〈春生逐地形／保胤〉

012 紫塵嬾蕨人拳手 碧玉寒蘆錐脱囊〈野相公〉

013 気霽風梳新柳髪 氷消浪洗旧苔鬢〈都良香〉

《裏書》下句羅城門鬼付之云々

014 庭増気色暗沙緑 林変容輝宿雪紅〈草樹暗／迎春／紀〉

《裏書》呂朗詠所用句云々<sup>1</sup>

015 いはそ、くたるひのうへのさはらひの

もえいつる春になりけるかな〈志貴皇子〉

- 016 山風にとくるこほりのひまことに  
うちいつる波や春のはつはな〈源正純〉
- 017 みわたせはひらのたかねにゆききえて  
若菜つむへく野はなりにけり〈兼盛〉
- 春興
- 018 花下忘帰自美景 樽前勸醉是春風〈白〉
- 019 野草芳菲紅錦地 遊糸繚乱碧羅天〈劉禹錫〉
- 020 歌酒家々花処々 莫空管領上陽春〈白〉
- 021 山桃復野桃 日曝紅錦之幅 門柳  
復岸柳 風宛麴塵之糸〈逐処花皆好／齊名〉
- 022 着野展敷紅錦繡 当天遊織碧羅綾〈野相公〉
- 023 林中花錦時開落 天外遊糸或有無〈田達音〉
- 《裏書》嶋田忠臣也／唐也／野篁同時／貞觀之比／人也
- 024 笙歌夜月家々思 詩酒春風処々情〈悦者衆／菅三品〉
- 025 も、しきのおほ宮人はいとまあれや  
さくらかさして今日はくらしつ〈赤人〉
- 026 はるはなをわれにてしりぬ花さかり  
こゝろのとけき人はあらしな〈忠峯〉
- 春夜
- 027 背燭共憐深夜月 踏花同惜少年春
- 028 はるの夜のやみはあやなしむめのはな  
いろこそみえねかやはかくる、〈躬恒〉
- 029 倚松樹以摩腰 習風霜之難犯也 和菜羹  
子日〈付若菜〉  
而啜口 期氣味之克調也〈菅丞相／雲林院行幸序〉
- 030 倚松根摩腰 千年之翠滿手 折梅  
花挿頭 二月之雪落衣〈尊敬／子日野遊序〉
- 《裏書》入道也／順法師也
- 031 ねのひする野辺にこまつのなかりせば  
千代のためしになにをひかまし〈忠見〉
- 032 ちとせまでちきりしまつもけふよりは  
君にひかれてよろつよやへむ〈能宣〉
- 《裏書》能宣為地下者親王子日野遊時所詠也父頼基聞此歌勸発曰  
汝若慮外／昇殿時供達子日者將詠何歌乎
- 033 ねのひしにしめつる野辺のひめこまつ  
ひかてや千代の影をまたまし〈清正〉
- 若菜
- 034 野中萋菜 世事推之蕙心 鑪下和羹  
俗人属之萋指〈菅丞相〉
- 《頭注》或〔作〕萋／醫師／指也
- 035 あすからはわかかなつませむかたをかの  
あしたのはらはけふそやくめる〈人丸〉
- 036 あすからは若菜つまむとしめし野に  
昨日も今日もゆきはふりつ、〈赤人〉

037 ゆきてみぬひともしのへとはるの野の

かたみにつめるわかな、りけり〈貫之〉

三月三日〈付桃〉

038 春來遍是桃花水 不弁仙源何処尋〈王維〉

《裏書》桃源行 時年十六

039 春之暮月 々之三朝 天醉于花桃李

盛也 我后 一日之沢 万機之余 曲水

雖遙 遺塵雖絶 書巴字而知地勢 思

魏文以翫風流 蓋志之所之 謹上小

序〈菅丞相〉

《裏書》思万機之故／為長卿／曲〈コク／キヨク〉／何モ是妨云々

040 煙霞遠近応同戸 桃李浅深似勸盃〈花時天似醉／菅〉

041 水成巴字初三日 源起周年後幾霜〈縈流送／羽觴／篤茂〉

042 礙石遲來心窃待 索流過過手先遮〈雅規／同前〉

043 夜雨偷湿 曾波之眼新嬌 曉風緩吹

不言之口先咲〈桃始華賦／紀〉

044 みちとせてなるていふも、のことしより

花さくはるにあひそしにける〈亭子院歌合／坂上是則〉

〈にけるかな〉

《裏書》亭子院歌合／坂上是則

暮春

045 払水柳花千万点 隔樓鶯舌雨三声〈元〉

046 低翅沙鷗潮落曉 乱糸野馬草深春〈菅／晚春遊／松山館〉

047 人無更少時須惜 年不常春酒莫空〈野〉

048 劉白若知今日好 応言此処不言何〈深春好／順〉

《裏書》唱和集何処深春好春深学士家云々

049 いたつらにすくす月日はおほかれと

はな見てくらすはるそすくなき〈興風〉

三月尽

050 留春々不住 春婦人寂寞 厭風々

不定 風起花蕭索〈白／落花〉

《裏書》文集第五十一落花〈古調〉

051 竹院君閑消永日 花亭我醉送残春〈白〉

052 惆悵春婦留不得 紫藤花下漸黄昏〈白／三月／三十日〉

053 送春不用動舟車 唯別殘鶯与落花〈送春／菅〉

054 若使韶光知我意 今霄旅宿在詩家〈同〉

055 留春不用開城固 花落隨風鳥入雲〈尊敬／三月尽〉

056 今日のみとはるをおもはぬときたにも

たつことやすきはなのかけかは〈躬恒／亭子院歌合〉

057 はなもみなちりぬるやとはゆくはるの

ふるさと、こそなりぬへらなれ〈貫之〉

058 またもこむ時そとおもへとたのまれぬ

我身にしあれはおそきはるかな〈貫之〉

閏三月

059 今年閏在春三月 剩見金陵一月花〔陸侍郎〕

060 帰谿歌鶯 更逗留於孤雲之路 辞林

舞蝶 還翩翩於一月之花〔順〕

061 花悔帰根無益悔 鳥期入谷定延期〔清滋藤〕同前

062 さくらはなはるくは、れるとしたにも  
人のこゝろにあかれやはせぬ〔中務〕  
伊勢イ

鶯

063 鶉既鳴忠臣待旦 鶯未出遺賢在谷〔鳳為王〕賦

064 誰家碧樹 鶯啼而羅幕猶垂 幾処

花堂 夢覺而珠簾未卷〔曉賦〕張説

065 咽霧山鶯啼尚少 穿沙蘆筍葉纔分〔白〕

066 台頭有酒鶯呼客 水面無塵風洗池〔白〕

067 鶯声誘引来花下 草色拘留坐水辺〔白〕

068 感同類於相求 離鴻去雁之応春囀  
会異氣而終混 龍吟魚躍之伴曉啼〔菅三品〕

069 燕姬之袖暫収 猜繚乱於旧柏 周郎之  
簪頻動 願間関於新花〔鳥声韻管絃〕菅三品

《裏書》周郎者周瑜也 知楽誤留必顧云々 近代之人不知本文為舞者

可恠也〔重テ夫ノ調泥風而不和曲咽霧而自誤ニ〕

070 新路如今穿宿雪 旧巢為後属春雲〔鶯出〕谷〔菅三品〕

071 西楼月落落花間 曲中殿燈残竹裏音〔宮鶯囀〕曉光〔菅三品〕

《裏書》件夜未講詩前村上天皇以青鳥問文時曰常称可勝叡草由今

夜如何〔文時申他時敢不挑申但今夜自謂恐有一日長云々〕御製  
者月落高歌御柳陰也 齊信卿曰此句勝於西楼句遠矣 但不造作也

072 あらたまのとしたちかへるあしたより

073 またるゝものはうくひすのこゑ〔素性〕延喜御時四季御屏風

074 あさみとりはるたつそらにうくひすの  
はつこゑまたぬ人はあらしな〔麗景殿女御〕

075 うくひすのこゑなかりせはゆきゝえぬ  
山さといかてはるをしらまし〔中務〕

霞

076 霞光曙後殷於火 草色暗来嬾似煙〔白〕早春

077 鑽沙草只三分許 跨樹霞纔半段余〔菅〕

078 昨日こそとしはくれしかはるかすみ  
かすかの山にはやたちにはけり〔立春日〕人丸

079 はるかすみたるやいつこみ吉野の  
よしの、山にゆきはふりつ、〔詠人不知〕

080 あさひさすみねのしらゆきむらさえて  
はるの霞はたなひきにけり〔兼盛〕

《裏書》件歌要五〔字〕句人々相分論也 或未銷之意也 又云頗消之

意也〔吉忠等論也〕

雨

081 或垂花下 潜増墨子之悲 時舞鬚間

082 暗動潘郎之思〔密雨散糸賦〕左窄

《裏書》左牟 文選張景陽雜詩文

081 長染鐘声花外尽 龍池柳色雨中深〈李嶠潘／無題〉

《裏書》李縉端〈或本〉

082 養得自為花父母 洗來寧弁葉君臣〈紀／仙家春雨〉

083 花新開日初陽潤 鳥老帰時薄春陰〈春色／雨中尽／菅三品〉

084 斜脚暖風先扇処 暗声朝日未晴程〈微雨自東／来／保胤〉

085 さくらかりあめはふりきぬおなしくは

ぬるともはなのかけにかくれむ〈能宣〉

086 あをやきのえたにかゝれるはるさめは

いともてぬけるたまかとそみる〈伊勢〉

梅

087 白片落梅浮潤水 黄梢新柳出城墻〈白〉

088 梅花帶雪飛琴上 柳色和煙入酒中〈章孝／標／早春〉

089 漸薫臘雪新封裏 儉綻春風未扇先〈寒梅結／早花／邑上御製〉

090 青糸繆出陶門柳 白玉装成庾領梅〈江相公／尋春花〉

091 五嶺蒼々雲往来 但憐大庾万株梅〈広川品／中／菅三品〉

092 誰言春色従東到 露暖南枝花始開〈菅／三品〉

093 いにしとしねこしてうへしわかやとの

わかきのむめは花さきにけり〈中納言安倍広庭〉

094 我せこにみせむとおもひしむめの花

095 それともみえずゆきのふれ、は〈赤人〉

かをとめてたれおらさらむむめのはな

あやなし霞たちなかくしそ〈躬恒〉

紅梅

096 梅含鶏舌兼紅氣 江弄瓊花帶碧文〈元／早春〉

097 浅紅鮮娟 仙方之雪魄色 濃香芬郁

098 妓鑪之煙讓薰〈橋正通／繞簷梅正開序〉

099 有色易分殘雪底 無情難弁夕陽中〈前中書王／庭前紅梅〉

100 仙白風生空簸雪 野鑪火暖未揚煙〈齊名〉

101 君ならて誰にか見せむむめのはな

いろをも香をもしる人そしる〈友則〉

102 いろかをはおもひもいれすむめのはな

つねならぬよによそへてそ見る〈花山法皇御製〉

柳

103 林鶯何処吟箏柱 墻柳誰家曬麴塵〈白／早春〉

104 漸欲抃他騎馬客 未多遮得上樓人〈新柳／白〉

105 巫女廟花紅似粉 昭君村柳翠於眉〈題峽中石上〉

106 誠知老去風情少 見此争無一句詩〈白〉

107 大庾嶺之梅早落 誰問粉粧 匡廬山之

108 杏未開 豈趁紅艷〈江納言／停盃看柳色序〉

109 雲擊紅鏡扶桑日 春嫋黃珠嬾柳風〈田達／音／早春／即事〉

110 稽宅迎晴庭月暗 陸池逐日水煙深〈柳影／繁初合／後中書王〉

111 潭心月泛交枝桂 岸口風来混葉蘋〈垂柳抃／緑水／菅三品〉

あをやきのいとよりかくるはるしもそ

- みたれてはなほほころひにける（貫之）  
 111 はるくれはしたりやなきのまよふいとの  
 いもかこゝろになりけるかな  
 112 あをやきのまゆにこもれるいとなれば  
 はるのくるにそいるまさりける（兼輔中納言）  
 《裏書》或本伊世歌云々／或本兼輔中納言  
 花  
 113 花明上苑 輕軒馳九陌之塵 猿叫空  
 山 斜月瑩千巖之路（閑賦／張讀）  
 114 池色溶々藍染水 花光焰々火烧春（白／早春）  
 115 遙見人家花便入 不論貴賤与親疎（白／尋春）  
 《裏書》或云白居易乍乘馬致師礼石之家師礼見之大怒云汝作詩方  
 ／免此過云々随言作此詩成親昵之契云々  
 116 瑩日瑩風 高低千顆万顆之玉 染  
 枝染浪 表裏一入再入之紅  
 《裏書》件序冷泉院花宴也 序遅無極主上欲還御而依聞序首留給／  
 万葉仙宮百花一洞也云々 件座講師 大内記藤雅材云々  
 117 誰謂水無心 濃艶臨兮波変色 誰  
 謂花不語 輕漾激兮影動臂（花光浮水上 已上／菅三品）  
 118 欲謂之水 則漢女施粉之鏡清瑩 欲  
 謂之花 亦蜀人濯文之錦粲爛（同題<sup>神イ</sup>／順）  
 119 織自何糸唯暮雨 裁無定様任春風（花開如散／錦／菅三品）  
 120 花飛如錦幾濃粧 織者春風未暈箱（英明／同）  
 121 始識春風機上巧 非唯織色織芬芳（落花散／如錦／英明イ）  
 122 眼貧蜀郡裁殘錦 耳倦秦城調尺箏（花小鳥／亦稀／相規）  
 123 よの中にたえてさくらのなかりせば  
 はるのこゝろはのとけからまし（業平）  
 124 我やとのほなみかてらにくるひとは  
 ちりなむのちそこひしかるへき（躬恒）  
 125 みてのみや人にかたらむやさくら  
 てことにおりていえつとにせむ（素性）  
 落花  
 126 落花不語空辞樹 流水無心自入池（白）  
 127 朝踏落花相伴出 暮随飛鳥一時帰（白／郊外／同遊）  
 128 春〔花〕面々 關入酣暢之筵 晚鶯声々 予  
 參講誦之座（後江相公／大王讀史記序）  
 129 落花狼藉風狂後 啼鳥龍鐘雨打時（江相公／送殘／春）  
 《裏書》楊巨源詩有狼藉龍鐘為对之詩 鳴声也<sup>スナケ也</sup>（或云稽聖賦云同觀  
 ハ龍鐘トオトロヘ／者ヲ云々／注云——ハ衰タル貌也云々）  
 130 離閣鳳翎憑檻舞 下楼娃袖願階翻（落花還／繞樹／菅三品）  
 《裏書》舞妓也  
 131 さくらちるこのした風はさむからて  
 そらにしられぬゆきそふりける（貫之）  
 132 とのもりのとものみやつここゝろあらは



このはるはかりあさきよめすな〈南庭前落花／公忠〉

《裏書》此歌有両説或曰朝忠納言所説云々 子細見於行成記

〔南殿前落花〕

躑躅

137 晩窓尚開紅躑躅 秋房初結白芙蓉〈白〉

138 夜遊人欲尋來把 寒食家応折得驚〈山榴／艶似火／順〉

139 おもひいつるときはの山のいはつゝし

いはねはこそあれこひしきものを〈平定文〉

《裏書》定文密通於国経大納言妻〈在原棟梁女〉件女後為時平大臣

室生敦忠中納言／件納言為小兒時定文書其背云々

款冬

《裏書》款冬非黄花事見本朝佳句

140 点着雌黄天有意 款冬誤綻暮春風

〈田達音／許渾イ／賦黄／花〉

《裏書》或本清慎公云以可尋

141 書窓有卷相收拾 詔紙無文未奉行〈保胤／題黄花〉

142 かはつなくかみなみかにはかけみえて

いまやさくらむやまふきの花〈原見女王〉

《裏書》和鳴也（※この歌の注か）

143 我やとのやえ山ふきはひとへたに

ちりのこらなむはるのかたみに〈兼盛〉

藤

133 悵望慈恩三月尽 紫藤花落鳥関々〈白〉

134 紫藤露底残花色 翠竹煙中暮鳥声〈四月有／余春／相規〉

135 たこの浦のそこさへにはふゝちなみを

かさしてゆかむみぬ人のため〈繩丸〉

136 ときはなるまつのなたてにあやなくも

かゝれる藤のさきてちるかな〈貫之〉

夏

更衣

144 背壁燈残経宿焰 開箱衣帯隔年香〈白〉

145 生衣欲待家人着 宿釀当招邑老酣〈讚州作／菅〉

146 はなのいろにそめしたもとのおしければ

衣かへうきけふにもあるかな〈源重之〉

《裏書》源重之為冷泉院坊時帯刀長為晨昏向陸奥曰別詠一首可献

一百／由有令旨

首夏

147 甕頭竹葉経春熟 階底薔薇入夏開〈白〉

148 苔生石面軽衣短 荷出池心小蓋疎〈物部安興／首夏〉

149 わかやとのかきねやはるをへたつらむ

夏きにけりとみゆるうのはな〈順〉

夏夜

150 風吹枯木晴天雨 月照平沙夏夜霜〈白〉

151 風生竹夜窓間臥 月照松時台上行〈白〉

152 空夜窓閑螢度後 深更軒白月明初〔紀〕

153 夏のよをねぬにあけぬといひおきし

人はものをやおもはさりけむ〔人丸〕

154 ほと、きすなくや五月のみしか夜も

ひとりしぬれはあかしかねつも〔人丸〕

155 夏の夜のふすかとすれはほと、きす

なくひとこゑにあくるしの、め〔貫之〕

《裏書》四条大納言■六条宮被談曰貫之歌仙也 宮曰不可及人丸

納言曰不可然／爰書各秀歌十首後曰被合八首人丸勝一首持一首

貫之／勝云々此歌持云々

端午

156 有時当戸危身立 無意故園任脚行〔艾人／菅〕

157 わかこまとけふにあひくるあやめ草

をひをくる、やまくるなるらむ〔頼基〕

158 昨日までよそにおもひしあやめ草

今日わかやとのつまとみるかな〔能宣〕

納涼

159 青苔地上消残雨 緑樹陰前逐晚涼〔白〕

160 露簟清螢迎夜滑 風襟蕭灑先秋涼〔白〕

161 不是禅房無熱到 但能心静即身涼〔白〕

《裏書》恒寂師房

162 班婕妤团雪之扇 代岸風兮長忘 燕

昭王招涼之珠 当沙月兮自得〔避暑对水石／匡衡〕

《裏書》姓也 女官也 作扇人也

163 臥見新面臨水障 行吟古集納涼詩〔菅〕

164 池冷水無三伏夏 松高風有一声秋〔英明〕

《裏書》文时被難曰可作水冷池風高松云々

165 す、しやと草むらことにちよれば

あつさそまさるとこなつのはな

166 したく、る水に秋こそかよふらし

むすふいつみの手さへす、しき〔中務／伊世イ〕

167 まつかけのいはるの水をむすひあけて

夏なきとしとおもひけるかな〔慧慶〕

晩夏

168 竹亭陰合偏宜夏 水檻風涼不待秋〔白〕

《裏書》夏日遊永安亭

169 夏はつるあふきと秋のしら露と

いつれかまつはをきまさるらむ

170 ねきこともきかてあらふる神たちも

今日はなこしと人はいふなり〔被愛宮〕

花橘

171 盧橘子低山雨重 楸欄葉戰水風涼〔白／西湖晩／帰〕

《裏書》シユロノ木

172 枝繫金鈴春雨後 花薰紫麝凱程〔後中／書王／盧橘／詩〕

173 さ月まつはなたち花のかをかけは

むかしの人のそてのかそする（伊勢）

174 郭公花たちはなのかをとめて

なくはむかしの人やこひしき

蓮

175 風荷老葉蕭条緑 水蓼残花寂寞紅（白／県西／郊秋）

176 葉展影飄当砌月 花開香散入簾風（階下／蓮／白）

177 煙開翠扇清風曉 水泛紅衣白露秋（許渾／池蓮）

178 岸竹條低応鳥宿 潭荷葉動是魚遊（在昌／池亭晚望）

179 縁何更覓吳山曲 便是吾君座下花

（法皇御賀題／華山千葉蓮／醍醐御製）

《裏書》屏風

180 経為題目仏為眼 知汝花中植善根（為憲／池蓮）

181 はちす葉のにこりにしまぬこゝろもて

なにかはつゆをたまとあさむく（良僧正）

郭公

182 一声山鳥曙雲外 万点水螢秋草中（許渾）

《裏書》去歲今年不変何 郭公晚枕駐聲過（或本有之）

183 五月やみおほつかなきにほと、きすなく

なるこゑのいと、はるけき（明日香皇子）

184 ゆきやらて山ちくらしつほと、きすいまひと

こゑのきかまほしさに（公忠）

185 さよふけてねなめさりせはほと、きす

ひとつてにこそきくへかりけれ（忠見）

螢

186 螢火乱飛秋已近 辰星早没夜初長（白）

《裏書》辰星古来難儀也 但見漢書出於四月中之星也 今過五月当

六月故云々

187 葦葭水暗螢知夜 楊柳風高雁送秋（許渾／上陽給／事）

188 明々仍在 誰追月光於屋上 皓々不消 豈

積雪片於床頭（秋螢照帙賦／紀）

189 山経卷浦疑過岫 海賦篇中似宿流（同上詩／直幹）

190 草ふかきあれたるやとのともしひの

風にきえぬは螢なりけり（赤人）

191 つゝめともかくれぬ物はなつむしの身よりあま

れるおもひなりけり（忠見 人丸）

蟬

192 遅々兮春日 玉甃暖兮温泉溢 嫋々兮

秋風 山蟬鳴兮宮樹紅（驪宮高／白）

193 千峯鳥路含梅雨 五月蟬声送麦秋（李嘉／祐）

194 鳥下翠蕪秦苑寂 蟬鳴黄葉漢宮秋（許渾）

195 今年異例腸先断 不是蟬悲客意悲（菅／新蟬）

196 歳去歳来聴不変 莫言秋後遂為空（紀／聴初蟬）

197 夏山のみねのこすゑのたかければ

198 そらにそせみのこゑはきこゆる  
これをみよ人もと<sup>に</sup>かめぬこひすとして  
ねをなくむしのなれるすかたを〈重光大納言〉

《裏書》<sup>4</sup>

扇

199 盛夏不銷雪 終年無塵風 引秋生手裏 歲月入懷中〈白〉  
200 不期夜漏初分後 唯翫秋風未到前〈輕扇動明月／菅三品〉  
201 あまのかは河辺すゝしたなはたに  
あふきのかせをなをやかさまし〈中務〉  
202 あまのかはあふきの風にきりはれて  
そらすみわたるかさゝきはし〈元輔〉  
203 君かてにまかする秋の風なれば  
なひかぬ草はあらしとぞ思〈中務〉

秋

立秋

204 蕭颯涼風与衰鬢 誰教計会一時秋〈白／立秋日〉  
205 鷓漸散間秋色少 鯉常趨処晚声微  
〈於菅師匠／旧亭賦／一葉落庭時／保胤〉  
《裏書》文時没後於旧亭所作也 故有其心云々／  
206 秋きぬとめにはさやかにみえねとも風のおと

207 にそおとろかれぬる〈敏行〉  
うちつけにもそのかなしきこの葉ちる秋  
のはしめを今日と思へは〈能宣〉

早秋

208 但嘉暑随三伏去 不知秋送二毛来〈白〉  
209 槐花雨潤新秋地 桐葉風涼欲夜天〈白〉  
210 炎景剩残衣尚重 曉涼潜到簟先知〈紀／早秋〉  
211 秋たちていくかもあらねとこのねぬる  
あさけの風はたもとさむしも〈志貴皇子〉  
七夕  
212 憶得少年長乞巧 竹竿頭上願糸多〈白／七夕〉  
213 二星適逢 未叙別緒依々之恨 五夜  
将明 頻驚涼風颯々之声〈美材／代牛女惜曉〉  
214 露応別涙珠空落 雲是残粧髮未成〈菅〉  
215 去衣曳浪霞応湿 行燭浸流月欲消〈含嬌渡漢河／文時〉  
216 風従昨夜声弥怨 露及明朝淚不禁〈江相公／七夕代／牛女〉  
217 詞託微派雖且遣 心期片月欲為媒〈代牛女待夜／輔昭〉  
《裏書》古人伝曰此度文時与輔昭相傳詩草云々  
218 あまの河とをきわたりにあらねとも  
君かふなてはとしにこそまで〈人丸〉  
219 ひと、せにひとよとおもへとたなはたの  
あひ見む秋のかきりなきかな〈貫之〉

220 としことにあふとはすれとたなはたの

ぬる夜のかすそすくなかりける〔躬恒〕

《裏書》此二是以実無為秀歌

秋興

221 林間煖酒焼紅葉 石上題詩掃緑苔〔白〕

222 楚思淼茫雲水冷 商声清脆管絃秋〔白〕

223 大底四時心惣苦 就中腸断是秋天〔白〕

224 物色白堪傷客意 宜将愁字作秋心〔野相公／客舎／秋情〕

225 由来感思在秋天 多被当时節物牽〔早秋／感懷／田忠臣〕

226 第一傷心何処〔最〕 竹風鳴葉月明前〔同〕

227 蜀茶漸忘浮花味 楚練新伝擣雪声〔暑往／寒来／高相公〕

《裏書》或本相規云々

228 うつらなくいはれの野辺の秋はきを

おもふ人とも見つる今日かな〔丹比国人〕

229 秋はなをゆふまくれこそたゝならね

おきのうは風はさのした露〔義孝少将〕

秋晚

230 相思夕上松台立 蚕思蟬声滿耳秋〔白〕

《裏書》秋蟬也

231 望山幽月猶蔵影 聴御飛泉転倍声〔菅三品〕

232 おくらやまふもとの野辺のはなすゝき

ほのかにみゆる秋のゆふくれ〔貫之〕

秋夜

233 秋夜長 夜長無睡天不明 耿耿残燈

背壁影 蕭々暗雨打窓声〔上陽人／白〕

234 遅々鐘漏初長夜 耿耿星河欲曙天〔白／長恨歌〕

235 燕子楼中霜月夜 秋来只為一人長〔白／燕子／楼〕

236 蔓草露深人定後 終霄雲尽月明前〔野相公／秋夜〕

237 兼葭洲裏孤舟夢 榆柳宮頭万里心〔秋雨／夜／齊名〕

《裏書》葦也

《裏書》園也 田也 / 水形也<sup>6</sup>

238 あしひきのやまどりのおのしたりおの

なか／＼しよをひとりかもねむ〔人丸〕

239 むつ事もまたつきなくにあけにけり

いつらは秋のなかつてふ夜は〔躬恒〕

八月十五夜〔付月〕

240 秦甸之一千余里 凜々氷鋪 漢家

之三十六宮 澄々粉飾

241 織錦機中 已弁相思之字 擣衣砧

上 俄添怨別之声〔八月十五夜賦／公乘億〕

242 三五夜中新月色 二千里外故人心〔禁中／对月／白〕

《裏書》新月人以為微月初生也 齊信公任被相論以此詩為証謂夕／見東方之月也

243 嵩山表裏千里雪 洛水高低兩顆珠〔白〕

244 十二廻之中 無勝於此夕之好 千万里  
 之外 皆争於吾家之光（紀納言）天高秋月明（白）  
 245 碧浪金波三五初 秋風計会似空虚（白）  
 《裏書》淳茂此詩於河原院講上皇被仰曰此夜所恨者先公不見云々

北野御事歎

246 白疑荷葉凝霜早 人漣蘆花過雨余  
 247 岸白還迷松上鶴 潭融可筭藻中魚  
 248 瑤池便是尋常号 此夜清明珠不如（月影滿）秋池（淳茂）  
 249 金膏一滴秋風露 玉匣三更冷漢雲（滿月明）如鏡（菅三品）  
 《裏書》時棟於齊信卿家曰古人未嘗犯詩忌諱賴澄曰依人也 古人不  
 避歎（玉匣）名予案椈或玉甲匣々者筥也 玉阿々者先匱也可分  
 別賴澄（以玉匣為玉折犯不分別必旧書椈処作匣字者誤也）  
 250 楊貴妃歸唐帝思 李夫人去漢皇情（對雨恋月）順（順）  
 《裏書》数年作設而待八月十五夜雨參六八条宮所作云々  
 251 水のおもにてる月なみをかそふれば  
 こよひそ秋のもなかなりける（順）

月

252 誰人隴外久征戍 何処庭前新別離（白）秋月（白）  
 253 秋水漲来船去速 夜雲収尽月行遲（郢展）汴水東歸（白）  
 254 不醉黔中争得去 摩围山月正蒼々（白）  
 《裏書》黔南所名也（天曆御時仰朝綱文時令文集第一詩二人俱進）  
 此詩時人感云々

255 天山不弁何年雪 合浦応迷旧日珠（統理平）禁中（翫月）  
 256 欲和豊嶺鐘声否 其奈華亭鶴警何（夜月似）秋霜（前中書王）  
 257 鄉淚數行征戍客 棹歌一曲釣漁翁（山川千里月）保胤（白）  
 《裏書》講夜文時不称歎作者伊鬱後日無人之時招曰汝入詩境云々  
 一曲字（人々難之作者云河千里一曲云々）

258 あまのはらふりさけ見ればかすかなる  
 みかさの山にいてし月かも（仲丸）

《裏書》安倍中丸於唐所詠

259 しら雲にはねうちかはしとふ雁の  
 かすさへみゆる秋のよの月

260 よにふれはもの思としもなけれども  
 月にいくたひなかめしつらむ（後中書王）

《裏書》件歌中書王存日四条大納言之入於金玉集大王没後除之可  
 恠云々

九日（付菊）

261 燕知社日辞巢去 菊为重陽冒雨開（李端）秋日作（白）

《裏書》皇甫冉詩云々

262 採故事於漢武 則赤萸挿宮人之衣  
 尋旧跡於魏文 亦黄花助彭祖之術（賜菊花序）紀納言（白）

《裏書》菊名也

263 先三遲兮吹其花 如曉星之軫河漢 引  
 十分兮蕩其彩 疑秋雪之廻洛川（同）

264 谷水洗花 汲下流而得上寿者三十

余家 地脈和味 滄日精而駐年顏者

五百箇歲（紀納言／同）

265 我やとのきくのしらつゆ今日ことに

いくよたまりてふちとなるらん（中務 或本伊勢）

菊

266 霜蓬老鬢三分白 露菊新花一半黄（白／九月八日）

267 不是花中偏愛菊 此花開尽更無花（元／菊花）

《裏書》隱君子鼓琴時元稹靈託人稱曰件詩開尽也 後字不可然云々

268 嵐陰欲暮 契松柏之後凋 秋景早移

嘲芝蘭之先敗（殘菊序／紀）

269 鄴鼎村閭皆潤屋 陶家兒子不垂堂（菊散一藜／金／善相公）

《裏書》善相公初作富貨心存可有褒譽由而菅家只美紀納言之廉士

路裏句／不被感此詩宴罷退出時相公不堪鬱結於建春門院見參菅

家／仰曰富貨字恨不作潤屋相公乃改作云々

271 蘭蕙苑嵐摧紫後 蓬萊洞月照霜中（花寒／菊点藜／菅三品）

《裏書》此詩深可案云々／或云不入詩境之者不得此詩心云々 文時

手自乍作不思／秀句保胤曰秀逸也云々 文時深思諾之云々

270 蘭苑自慙為俗骨 權籬不信有長生（菊是草中仙／保胤）

《裏書》秋草也（※この詩の注か）

273 こゝろあてにおらはやおらむはつしもの

おさまとはせるしらさくのはな（躬恒）

272 ひさかたの雲のうへにてみるきくは

あまつほしとそあやまたれける（敏行）

九月尽

274 縦以嶮函為固 難留蕭瑟於雲衢 縦

令孟賁而追 何遮爽籟於風境（山寺九月尽／順）

《裏書》秋草也（籟ハ笛代云々）

或本云／九月尽於仏性院／惜秋序

275 頭目縦隨禪客乞 以秋施与太応難（同／順）

276 文峯案轡白駒景 詞海艤舟紅葉声（秋未出／詩境／以言）

《裏書》以言与斉名被相試日（秋日也）所作云々 以言初作駒過景

〔葉〕落声云々 六条宮見／件草被樂白字要由仍改作云々 斉名

常以為怨称曰最手懸片手／廻何計云々 斉名臨終宮被訪報命恩

問有恐悚千廻但白字事不忘却云々

277 山さひし秋もすきぬとつくるかも

まきの葉ことにをけるあさしも（八束）

《裏書》誰歌（※この歌の注か）

278 くれてゆくあきのかたみにおくしも（も）

我もとゆひのしもにそありける（兼盛）

女郎花

279 花色如蒸栗 俗呼為女郎 聞名戲欲

契偕老 恐惡衰翁首似霜（順／女郎花）

280 をみなへしおほかる野辺にやとりせは

あやなくあたの名をやたつへきチナム（遍昭僧正／美材イ）

281 をみなへし見るにこゝろはなくさまて

いと、むかしの秋そこひしき（北宮御着裳屏風歌／清慎公）

萩

282 曉露鹿鳴花始発 百般攀折一時情（新撰／万葉集）

《裏書》うづらなくいはれの、べの秋はぎを／

283 おもふ人をも見つるけふかな（伊世 或本此歌也）<sup>8)</sup>

あきの野にはきかるをのこなはをなみ

ねるやねりそのくたけて所思

284 うつろはむことたにおしき秋はきを

おれぬはかりもをけるつゆしらゆい本かな（伊勢）

285 秋の野のはきのにしきをふるわかやとさとに

しかのねなからうつしてしかな（元輔）

蘭

286 前頭更有蕭條者 老菊衰蘭三両藜（白／杪秋）

287 扶桑豈無影乎 浮雲掩而忽昏 藜蘭

豈不芳乎 秋風吹而先敗（菟裘賦／前中書王）

《裏書》或云前中書王占龜山麓宮山庄之刺得小野宮殿讒弥以／蟄

居作此詩閉箱置之中書王薨逝之後天子自然伝覽／及于君昏臣

諛ウツラヘル之所龍顔不ヨロヒ怡 投奇也 献覽人成恐之処／少時又覽也至此

句大啼泣云々

288 凝如漢女顔施粉 滴似鮫人眼泣珠（紅蘭受／露／都良香）

289 曲驚楚客秋絃韻 夢断燕姬曉枕薰（蘭氣／入輕風／直幹）

《裏書》琴有幽蘭曲／后 夢得蘭ヲ懷妊者也

290 ぬししらぬかにはほひつ、あきの野に

たかぬきかけしふちはかまそも（素性）

槿

291 松樹千年終是朽 槿花一日自為榮（白／放言詩）

292 来而不留 薤薤有弘晨之露

去而不返 槿籬無投暮之花（願文／前中書王）

293 おほつかなたれとかしらむ秋きりの

たえまに見ゆるあさかほのはな

294 あさかほおなにはかなしとおもひけむ

人をもはなはさこそみるらめ（道信少将）

前栽

295 多見栽花悦目儻 先時予養待開遊（栽秋花／菅三品）

《裏書》待開遊末生等伊鬱然而以文集ノ詩我遊可為証／

豫養ハ見ニ後漢書帝紀云々

296 自吾閑寂家僮倦 春樹春栽秋草秋（白）

《裏書》入道中納言（長兼卿）云伝聞故少納言入道云此詩心ハ刺務

ノ時ハ家僮無閑暇テ／先春先秋以有暇時栽之而閑居之後僮僕

有暇春花春栽ト／作也云々

297 閑思看汝花紅白 方是当吾鬢白時年（保胤）

298 曾非種処思元亮 為是花時供世尊（種菊／菅）



《裏書》 陶潜也 愛菊愛柳

299 ちりをたにすえしとおもふうえしより おきゆふに

いもとわかぬるところなつのはな〈躬恒〉

300 はなによりものをそおもふしらすつゆの

をくにもいか、ならむとす覧〈高氏〉

紅葉

301 不堪紅葉青苔地 又是涼風暮雨天〈白〉

302 黄纈纈林寒有葉 碧瑠璃暗水淨無風〈白〉

303 洞中清浅瑠璃水 庭上蕭条錦繡林〈保胤〉山水唯／紅葉イ

304 外物獨醒松澗色 余波合力錫江声〈山水唯紅葉／以言〉

《裏書》故橋工部〈孝親〉被語曰少年向江博士宅〈匡衡〉博士書此

句於冠筥／見之曰以言詩可謂日新ト ヒヨリナリ

305 しらすつゆもしくれもいたくもるやまは

した葉のこらすいろづきにけり〈貫之〉

306 むら／＼のにしきと見るさほやまの

は、そのもみちさりた、ぬまは〈清正〉

落葉

307 三伏而宮漏正長 空偕兩滴 万里〔而〕郷

園何在 落葉窓深〈秋賦〉

309 秋庭不掃携藤杖 閑踏梧桐黄葉行〈白〉

308 城柳宮槐漫搖落 秋悲不到貴人心〈白〉早入皇城

310 梧楸影中 一声之雨空灑 鷓鴣背

上 数片之紅纈殘〈順／葉下風枝疎序〉

311 樵蘇往反 杖穿朱買臣之衣 隱逸

優遊履踏葛稚仙之藥〈落葉山中路序／相如〉

《裏書》以紅葉為藥例 〈紅／雪〉履字或作履文選之意歟

313 隨風落葉含蕭瑟 濺石飛泉弄雅琴〈順／秋光變山水〉

312 逐夜光多吳苑月 每朝声少漢林風〈落葉／隨日尽／後中書王〉

《裏書》漢林事人々伊鬱曰若漢之上林也 離合任意也宮以詞林証

人々／歎伏以言曰此句雖佳句於中書王御詩不如一枝月稱為孫謀

句

314 あすか、はもみち葉なかるかつらさの 葉也

山の秋風ふきそしつらし〈人丸〉 ぬい

315 神な月しくれと、もにかみなみの

もりのこは、ふりにこそふれ〈貫之〉 モリナ

316 みる人もなくてちりぬるおくやまの

もみちは夜のにしきなりける〈貫之〉

雁〈付帰雁〉

317 万里人南去 三春雁北飛 不知何

歲月 得与汝同帰〈文選 詠雁／天宝集イ〉

《裏書》人者我歟

318 尋陽江色潮添滿 彭蠡秋声雁引来〈劉禹錫／登清／輝樓〉

319 四五朶山粧雨色 兩三行雁点雲声〈杜荀鶴／淮陽道／中作〉

《裏書》四五朶古来難義也 但大略見古集等以蓮喻山二也／呂榮

望華山詩曰華岳森秀色濃ナリ削成三朶ノ碧芙蓉張方六望ノ  
 女九山詩曰空ク留メテ香几ヲ在ハ山上ニ碧玉ノ蓮華ノ数朶高シ  
 云々

320 虚弓難避 未抛疑於上弦之月懸

奔箭易迷 猶成誤於下流之水急（江相公）

321 雁飛碧落書青紙 隼擊霜林破錦機（田達ノ音ノ秋傍ノ山行）

《裏書》懸字急字不可有由 文時心中思之三十年後案得可必有由ノ

称曰我減於朝綱三十年云々

322 碧玉装箏斜立柱 青苔色紙数行書（天浄識ノ寶鴻ノ菅）

323 雲衣范叔羈中贈 風櫓瀟湘浪上舟（秋雁似ノ故人ノ後中書王）

《裏書》古人曰范叔与瀟湘所謂双声側对也云々 蕭相对范叔歟ノ

雁名也

324 あき風にはつかりかねそきこゆなる

たかたまつさをかけてゆくらむ（友則）

帰雁

325 山腰帰雁斜索帯 水面新虹未展巾（都在中）

はるかすみたつをみすて、ゆくかりは

花なきさとにすみやならへる 伊勢

虫

327 切々暗窓下 嚶々深草裏 秋天思婦

心 雨夜愁人耳（白）

328 霜草欲枯虫思苦 風枝未定鳥棲難（白）

329 床嫌短脚蝻声聞 壁厭空心鼠孔穿（野ノ秋夜）

330 山館雨時鳴自暗 野亭風処織猶寒（蝻声ノ入夜催ノ直幹）

331 藜辺怨遠風聞暗 壁底吟函月色寒（同前ノ順）

《裏書》詩合詩也 敵直幹也 直幹詩発句有月字順聞之 存此詩可

勝也

332 いまこむとたれたのめけむあきのよの

あしかねつもまつむしのなく（素性ノ在材イ）

333 さりくすいたくなきそ秋の夜の

なかきおもひはわれそまされる（藤忠房ノ素性イ）

鹿

334 蒼苔路滑僧帰寺 紅葉声乾鹿在林（温庭筠）

335 暗遣食苹身色変 更随加草徳風来（白鹿ノ紀）

336 もみちせぬときはの山にすむしかは

をのれなきてやあきをしるらむ（能宣）

337 ゆふつくよおくらの山になくしかの

こゑのうちにはや秋はきぬらむ（貫之）

露

338 可憐九月初三夜 露似真珠月似弓（白）

《裏書》古人相伝曰憐字訓楽也 避禁諱之時可用件訓

339 露滴蘭蕤寒玉白 風◆松葉雅琴清（英明）

340 さをしかのあきたつをの、秋はきに

たまと見るまでをけるしら露（家持）

※◆…行十含

霧

- 341 竹霧曉籠銜嶺月 蘋風暖（曉）送過江春（白）
- 342 雖愁夕霧埋人枕 猶愛朝雲出馬鞍（江相公）
- 343 かはきりのふもとをこめてたちぬれば  
そらにそ秋の山はみえける（深養父）
- 344 たかためのにしきなればか秋きりの  
さそ（は）のやまへをたちかくす覽（友則）

擣衣

- 《裏書》此詩無流布之本 或本有之／  
誰家思婦秋擣帛 月苦風淒砧杵悲<sup>①</sup>
- 345 八月九月正長夜 千声万声無了時（白）
- 346 北斗星前橫旅雁 南樓月下擣寒衣（白）
- 《裏書》劉元淑詩也 不可謂白
- 347 擣処曉愁困月冷 裁將秋寄塞雲寒（篤茂）
- 348 裁出還迷長短製 辺愁定不昔腰困（直幹）
- 349 風底香飛双袖举 月前杵怨両眉低（同題）
- 350 年々別思驚秋雁 夜々幽声到曉鶴<sup>（曉）</sup>（後中書王／同上）
- 《裏書》後中書王文藻此詩後万人難伏云々
- 351 唐衣うつこゑきけは月よゝみ  
またねぬ人をそらにしるかな（貫之）

冬

初冬

- 352 十月江南天氣好 可憐冬景似春花<sup>（華）</sup>（白）
- 353 四時牢落三分減 万物蹉跎過半凋（醍醐御製）
- 354 床上卷取青竹簾 篋中開出白綿衣（菅）
- 355 神な月ふりみふらすみさためなき  
しくれそ冬のはしめなりける

冬夜

- 356 一盞寒燈雲外夜 數盃温酎雪中春（白）
- 《裏書》山居雪夜
- 357 年光自向燈前尽 客思唯從枕上生（尊敬）
- 358 おもひかねいもかりゆけはふゆの夜の  
河風さむみ千鳥なくなり（貫之）
- 歲暮
- 359 寒流帶月澄如鏡 夕吹和霜利似刀（白）
- 《裏書》呂朗詠所用句云々
- 360 風雲易向人前暮 歲月難從老底還（花下春<sup>（命）</sup>／良春道）
- 361 ゆくとしのおしくもあるかなますかゝみ  
見る影さへにくれぬとおもへは（貫之）
- 炉火
- 362 黄醅緑醕迎冬熟 絳帳紅炉逐夜開（白）
- 363 看無野馬聽無鶯 臘裏風光被火迎
- 《裏書》遊糸名也
- 364 此火心鑽花樹取 对來終夜有春情（火是臘／天春／菅三品）

365 他時縦醉鷺花下 近日那離獸炭辺（輔昭）

《裏書》後句也<sup>12</sup>

366 うつみ火のしたにこかれし時たにもより

かくにくまる、おりそわひしき（業平）

霜

368 三秋岸雪花初日 一夜林霜葉尽紅（温庭筠）

367 万物秋霜能壞色 四時冬白最凋年（白）

369 困寒夢驚 或添孤婦之砧上 山深

感動 先侵四皓之鬢辺（青女司霜賦）／紀

370 君子夜深音不警 老翁年晚鬢相驚（菅）

《裏書》鶴名也

371 声々已断花亭鶴（謝） 歩々初驚葛屨人（寒霜凝）／菅

372 晨積瓦溝鴛變色 夜零華表鶴吞声（同前）／紀

373 夜をさむみねさめてさけはをしそなく

はらひもあえずしもやをくらむ（題読人不知）

雪

374 曉入梁王之苑 雪滿群山 夜登庾

公之楼月明千里（白賦）

375 銀河沙漲三千界 梅嶺華開（謝）一万株（白）

376 雪似鷺毛飛散乱 人披鶴氅立徘徊（白）

377 或逐風不返 如振群鶴之毛 亦当晴

猶殘 疑綴衆狐之腋（春雪賦）／紀

378 翅似得群棲浦鶴 心応乗輿棹舟人

（池上）／初雪／（邑上）／御製

《裏書》或本有此詩

暗夜猶行明月地 人間還踏白雲天 良

379 立於庭上頭為鶴 坐在炉辺手不龜（菅）

380 班女困中秋扇色 楚王台上夜琴声（尊敬）／題雪

《裏書》琴ノ曲ニ白雪曲アリ

381 みやまにはめつらしくみるはつゆきを（ハ）

よしの、やまにふりやしぬらむ（忠峯）

382 み吉野、山のしらゆきつもるらし

ふるさとさむくなりまさるなり（是則）

383 ゆきふれは木ことにはなそさきにける

いつれをむめとわきておらまし（友則）

氷（付春氷）

384 氷封水面聴無浪 雪点林頭見有花（菅）

385 霜妨鶴唳寒無露 水結狐疑薄有氷（相如）

386 おほそらの月のひかりのさむければ

影みし水そまつこほりける（相規）

（春氷）（或本无）

387 氷消見水多於地 雪霽望山尽入楼（白）

388 氷消漢主応疑霸 雪尽梁王不召枚（尊敬）

389 胡塞誰能全使節 呼沱還恐失臣忠（雪尽氷舞）／相規

390 やまかはのみきはまされりはる風に

たにのこほりは今日やとく覧〈維忠イ〉

霰

391 躰牙米簸声々脆 龍領珠投顆々寒〈菅〉

392 み山にはあられふるらしとやまなる

まさきのかつらいろづきにけり

仏名

393 香火一炉燈一盞 白頭夜礼仏名経〈白〉

394 香自禅心無用火 花開合掌不因春〈菅／白微霰〉

395 あらたまのとしもつくればつくりけむ

つみものこらすなりやしぬらむ〈兼盛〉

396 かそふれは我身につもるとし月を

をくりむかふとなにいそく覧〈同人〉

和漢朗詠集上

注

(1) この注、あるいは13番歌のものか。

(2) 183番歌は、一首分の行間に詰めて書く。

(3) 191番歌は、190番歌の横に詰めて書く。

(4) 該本では「扇」の項目全体がなく、夏部は「蟬」で終わり、秋部になる。そのため、部立名「秋」の直前に「○」を付し、裏書に「扇」の項を書写する。ここでは、裏書より補っておく。

(5) 206番歌は一首分の行間に詰めて書く。

(6) これら注、どの詩歌のものか判然としない。仮にここに載せる。

(7) 「尽」の傍書「後」は朱筆。

(8) この歌、秋興28番歌。

(9) 「時」の傍書「年」は朱筆。

(10) 「暖」の傍書のうち、〈晚イ〉は「暖」の左側に書入。

(11) この詩、345番と同詩の第一、二句に当たる。

(12) この注、365番の注か、364と365は一連の詩。

(13) 「春氷〈或本无〉」は行間補記。

# FUJIWARA Kinto's "Wakanroueisyu" in the Ikuta Family Collection, Kansai University Library: Introduction and Modern Japanese Transliteration.

ESAKA Yukiko

The copy of *Wakan roeishu* housed at Kansai University Library is a set of two companion manuscript scrolls believed to have been transcribed during the Kamakura period (1185–1333). Many such handwritten copies of *Wakan roeishu* exist, but what makes the Ikuta Family copy noteworthy are the annotations written on the verso (*uragaki*) of the first scroll. These annotations were made by Oe no Masafusa, and are known as the "*Roei gochu*." Several other manuscript copies of *Wakan roeishu* are also known to contain the "*Roei gochu*," such as the Jowa manuscript. But in the Jowa and other manuscript copies, other notes have also been interpolated into the text, so they cannot be regarded as pristine examples of the "*Roei gochu*." Given these circumstances, the Ikuta Family manuscript seems to correspond more closely to the characteristics one would expect of a manuscript that had been in Oe no Masafusa's possession, and thus may be closer to the original text.

The paper then reprints the *uragaki* annotations and the relevant portions of the main text of the Ikuta Family manuscript and presents them for comparison.